

テーマ: 19世紀日本における「作者」の諸相

ニコラ・モラール

ジュネーブ大学文学部東アジア研究所講師 / 日仏会館フランス事務所研究員

急速なグローバル化が進行していった19世紀は、日本にとっても、新しい国際秩序の中でみずからの位置が問われる時期であった。近代的な国境の観念が広まったことで、従来の国家間の関係や、国内外の境界が再編され、それとともにヒト・モノ・情報の流通にも大きな変化が生れたのである。そうした大規模な変動の渦中であつた作家・文筆家たちは、変わりゆく空間をいかに把握し、それをどのように描き、そして何故にそれを描こうと試みたのか。それに際してはどのジャンル、どの言葉が選択されたのか。そしてそうした文芸作品は、同時代にどのような影響を及ぼし、新しい表象を生み出していったのか。

こうした考察の一環として、今回は「作者」の概念を取り上げてみたい。今日、「作者」という概念からは一般的に「個性的な創作者」というイメージが喚起されるであろう。それはロマン主義の思想が現代に至るまで通念としていかに定着してきたかを物語っている。文化製品市場が拡大し、著作権侵害行為が増加する現代においても、文芸創作の美学・法的な基盤が揺るがず、むしろ逆に固まっていくようである。1960年代後半、ロン・バルトなどによって「作者の死」が宣言され、日本にも反響を引き起こしたが、それ以来、「作者」という概念の歴史性が問われ、いつ頃から如何にして作者が文学作品の生産・流通・享受に中枢的な地位を得たかという課題が浮かび上がってきた。

今回の発表では、その問題意識を出発点に据えながら、美学(オリジナリティ)や法学(著作権)に限らず、文学(作者の自己表象)・社会学(作者の職業化)・哲学(個性の誕生)・経済学(作者の収入)など、様々な観点から、日本の19世紀的な「作者」象を追及したいと思う。

講師の研究活動:

『幸田露伴の初期作品における「風流」概念』をテーマにした論文で2007年にジュネーブ大学文学部日本学学科博士号を取得。
その一部は、「風流仏」・「対髑髏」・「五重塔」他二編のフランス語訳としてLes Belles Lettres書店で2009年に出版されている。

日時: 2014年 **12月19日**(金) 18:30～20:30

場所: 法政大学市ヶ谷キャンパス58年館2階
国際日本学研究所セミナー室

対話者: 中丸 宣明(法政大学文学部教授)

司会: 安孫子 信(法政大学国際日本学研究所所員、文学部教授)

申込専用フォームからお申込みください
<https://www.event-u.jp/fm/10457.html>

法政大学国際日本学研究所 事務室
TEL 03-3264-9682 <http://hijas.hosei.ac.jp>

